

二〇一九年一月二十六日

担当 深澤一幸

使天文不效者。時有理亂。道不空出。古者帝王見微知著。因任行其事。順其炁。遂得天心意。如長吉。逆之則水旱炁乖忤。流災積成。變怪不可止。名為災異。眾賢迷惑。不知逆順之道。使其知之。逢太平則安枕而理。中平則可力而行之。逢不平。以道自輔而備之。猶若夏至則備暑。冬至則備寒。此之謂也。天道有常運。故順之則吉昌。逆之則危亡。天道戰鬥。其命傷。日月失度。列星亂行。能用者自力。無敢閉藏。賢明上下令自安。

校正

太平經卷五十 天文記訣七十三

- 使天文不效者 經作「使天文不效者。正是也」
- 時有理亂。道不空出 經作「故事不空見。時有理亂之文。道不空出。時運然也」
- 古者帝王見微知著 經作「是故古者聖賢帝王見微知著」
- 如長吉 經作「故長吉」
- 變怪不可止。名為災異 經作「變怪不可。名為災異」
- 眾賢迷惑。不知逆順之道 經作「眾賢迷惑不知。但逆氣不順。時務所為也」
- 使其知之 經作「樂欲使其知之。以自安也」
- 逢太平則安枕而理 經作「逢其太平則可安枕而治」
- 中平則可力而行之 經作「逢其中平則可力而行之」
- 逢不平。以道自輔而備之 經作「逢其不平則可以道自輔而備之」
- 猶若夏至則備暑。冬至則備寒 經作「猶若夏至則為其備暑。冬至則為其備寒」
- 天道有常運 經作「天道有常運。不以故人也」
- 賢明上下令自安 經作「慎無賊傷。天之秘書。以歸仁賢。原明上下。令以自安」

天文をして効さざらしむ者。時に理乱有り、道は空出せず。古者帝王は微を見て著を知り、因りて其の事を行い、其の氣に順うに任せ、遂に天の心意を得、故に長吉なり。之に逆わば則ち水旱の氣は乖忤し、流災は積成し、變怪は止む可からず。名づけて災異と為す。眾賢は迷惑し、逆順の道を知らず。其れをして之を知らしめん。太平に逢わば則ち枕に安んじて理め、中平ならば則ち力めて之を行う可く、不平に逢わば、道を以って自ら輔けて之に備え、猶お夏至らば則ち暑さに備え、冬至らば則ち寒さに備うるが若く、此れの謂い也。天道には常運有り、故に之に順わば則ち吉昌、之に逆らわば則ち危亡なり。天道戦闘せば、其の命は傷つき、日月は度を失い、列星は行を乱す。能く用いる者は自ら力め、敢えて閉藏すること無し。上下を賢明して自ら安んぜしめん。

天文があらわれないのは、このことである。時には治まると乱れるの違いがあり、道は意味なく出現はしない。昔帝王はかすかなきざしをみて後の顕著な結果を知った。だからその事を行い、その気にしたかうにまかせ、そこで天の御心にかない、ゆえに長寿大吉だったのである。天の御心にさからえば、洪水や干ばつをおこす気が不順になり、災害がつきつきと積み重なり、異常気象がやまず、それを災異と名づけた。賢人たちも困惑し、さからうかしたうかかの道理を知らず、かれらに知らせたく思うのだ。太平に逢えば枕に安眠してでも治めることができ、中程度の太平に逢えば頑張って治めればよく、太平でないときは道の補助によって準備しておく。それは夏が来れば暑さに備え、冬が来れば寒さに備えるようなもので、このことを言うのである。天道には常の運行がある。だからそれにしたがえば吉祥、それにさからえば滅亡である。天道が戦闘すれば、その命は傷つき、日と月は運行の度数を失い、列星ははずれた軌道をとる。これを用いることができる者は頑張って、(天の秘書を)隠してはならぬ。上下に明らかに示し、安心させるように。

\*理亂 「雲笈七籤」卷一「綜敘道德」道德者天地之祖。天地者萬物之父。帝王者三才之主。然則道德天地帝王。一也。而有今古燒淳之異。堯桀理亂之殊者。何哉。……天地之道。陰陽有數。故理亂之數也。

\*得天心意 「太平經鈔」卷三・十三葉裡 上得天心。下得地意。

\*乖忤 「論衡・逢遇」君不欲為治。臣以忠行佐之。操志乖忤。不遇固宜。「北史・儒林傳・李興讓」與其好合。傾身無容。有乖忤。便即疵毀。

\*流災

\*安枕 「史記・黥布列傳」使布出於上計。山東非漢之有也。出於中計。勝敗之數未可知也。出於下計。陛下安枕而臥矣。

\*天道戰鬥 「太平經」卷九十二「三光蝕訣」是天地之大怨。天地戰鬥。不知其驗見效於日月星辰。

灸刺者。所以調和安三百六十脈。通陰陽之炁而除害者。三百六十脈者。應一歲三百六十日。日一脈持事。應四時五行而動。出外周旋。身上總於頂內。繫於臍裏。咸應四時而動移。有疾則不應度數。往來失常。或結或傷。或順或逆。故當治之。火者。太陽之精。公正之明也。所以察奸除害惡也。刺者。少陰之精也。太白之質。所以用義斬伐。治百中百。治十中十。此得天經脈讖書也。實與脈相應。則神為驅使。治十中九失一。與除脈相應。精為其驅使。治十中八。人道書也。人意為其使。過此而下。不可以治疾也。反或傷。甲脈有病。反治乙。名為恍惚。不知脈獨傷絕。故樂知天道神不神。相應與不也。直置一病人於前。名為脈本文。比若書經道本文。令眾賢而識其病。或有長於上。或有長於下。三百六十脈。各有所觀。取其行事常所長而治訣者。以記之。十十中者是也。不中者皆非也。

校正

太平經卷五十 灸刺訣七十四

- 灸刺者所以調和安三百六十脈 經作「灸刺者所以調安三百六十脈」
- 身上總於頂內。繫於藏裏。咸 經作「身上摠於頭頂。內繫於藏。衰盛」
- 火者 經作「灸者」
- 刺者 經作「針者」
- 太白之質。所以用義斬伐 經作「太白之光。所以用義斬伐也」
- 實與脈相應則神為驅使 經作「實與脈相應則神為其驅使」
- 治十中九失一。與除脈相應 經作「治十中九失一。與陰脈相應」
- 反或傷 經作「反或傷神」
- 故樂知天道神不神 經作「故欲樂知天道神不神」
- 直置一病人於前。名為脈本文 經作「直置一病人前。名為脈本文」
- 今眾賢而識其病 經作「今眾賢圍而議其病」
- 三百六十脈。各有所觀 經作「三百六十脈。各有可觀」

灸刺なる者は、調和して三百六十脈を安んじ、陰陽の氣を通じて害を除く所以の者。三百六十脈なる者は、一歳三百六十日に応ず。日に一脈が事を持ち、四時五行に依じて動く。外に出て、身上に周旋し、頂内に総べられ、藏裏に繋がれ、咸な四時に依じて動移す。疾有らば則ち度数に依ぜず、往来常を失し、或は結び或は傷つき、或は順がい或は逆らい、故に当之を治むべし。火(灸)なる者は、太陽の精、公正の明也。紆を察し害悪を除く所以也。刺なる者は、少陰の精也。太白の質、義を用いて斬伐する所以なり。百を治めて百に中り、十を治めて十に中る、此れ天経の脈讖書を得る也。実は脈と相応ずれば則ち神は驅使せらる。十を治めて九に中り一を失せば、除(陰)脈と相応じ、精は其れに驅使せらる。十を治めて八に中らば、人道書也。人意は其れに使わる。此れを過ぎてより下は、以って疾を治む可からざる也。反つて或は(神を)傷つく。甲脈に病有るに、反つて乙を治め、名づけて恍惚と為す。脈の独り傷絶するを知らず、故に天道の神なるか神ならざるか、相応ずるか不かを知らざる也。直に一病人を前に置き、名づけて脈本文と為す。比えば経を書して本文と道うが若し。衆賢をして其の病を識らしめ、或は長の上に有り、或は長の下に有り、三百六十脈、各おの観る所有り。其の行事常に長じて治訣たる所の者を取りて、以って之を記す。十に十中る者は是也。中らざる者は皆非也。

針灸というのは、調和により三百六十脈を安定させ、陰陽の氣を通して害を除くものである。三百六十脈というのは、一年三百六十日に対応する。日に一脈が行事を管理し、四時五行に対応して動く。外に出て、身体で活動し、頭頂の中に集められ、臓器の中につなぎ止められ、すべて四時に対応して移動する。疾病があれば決まった度数に対応せず、往来は常軌を失い、

結んだり傷ついたり、したがったりさからったりする。だからこの脈を治めねばならない。灸とは太陽の精氣・公正な光明である。だから奸悪を察知し害悪を除くのである。針とは少陰の精氣である。太白金星の質をもち、だから義でもって害悪を斬伐するのである。百を治めて百にあたり、十を治めて十にあたる。これは天の経脈の讖書を得たのである。まことに脈と対応すれば、神はそれに駆使される。十を治めて九にあたり一を失う。陰脈と対応すれば、精はそれに駆使される。十を治めて八にあたるのは、人道の書である。人意はそれに駆使される。これ以下は、病を治めることができないのである。かえって神を傷つけることになる。甲脈に病があるのに乙脈を治めるのは、恍惚と名づける。脈だけが傷つき駄目になることがわからない。だから天道が神なのかどうか、対応しているのかどうかを知りたがるのである。じかに一病人を前に置くのを、脈本文と名づける。たとえば経を書写して本文というようなもので、賢者たちにその病を認識させるのである。あるものは上部が得意。あるものは下部が得意、三百六十脈、おのおの観察するところがある。その治療でいつも得意で秘訣を知るところを取り、それを記録する。十に十があたるものは正しいのである。あたらぬものは誤りである。

\*灸刺 「素問・血氣形志」形樂志苦。病生於脈。治之以灸刺。高士宗解「脈者。心之所主也。治之以灸刺者。或灸以補之。或刺以通之」 「急就篇」卷四 灸刺和藥逐去邪 顏師古注「灸。以火艾灼痛也。刺。以箴刺之也」。

\*持事

\*周旋 「春秋左氏傳・僖公十五年」亂氣發憤。陰血周傳。張脈僨興。外彊內乾。進退不可。周旋不能。

\*度數 「周禮・天官・小宰」其屬六十。鄭玄注「六官之屬。三百六十。象天地四時。日月星辰之度數」

\*太陽之精 「無上秘要」卷九十四「昇太空品」若學者休糧山林。長齋五岳。絕塵人間。遠思清真者。得日日服日根之霞。吞太陽之精。則身生玉澤。面有流光。「雲笈七籤」卷一十九「老子中經・第三十五神仙」丹田中赤者。太陽之精也。心火之氣也。其外黑者。太陰之精也。腎水之氣也。

\*公正之明 「荀子・正論」故上者下之本也。．．．上公正則下易直也。

\*少陰之精 「雲笈七籤」卷一十九「同上」其上白者。如銀盤而照覆之者。少陰之精也。肺金之氣也。

\*太白 「真誥」卷八「甄命授」頃天氣激逸。陰景屢變。太白解體於二辰之中。愆勃於紫房之下。「雲笈七籤」卷十九「老子中經・第四十五神仙」次思瞻中有太白明星。三光曜而相照。

\*用義斬伐

\*天經脈讖書 「登真隱訣」卷下「誦黃庭經法」經又云。皆在心內通天經。則不得各在五臟之内。六府之宮。「真靈位業圖」序 搜訪人綱。究朝班之品序。研綜天經。測真靈之階業。

「素問·離合真邪論」故天有宿度。地有經水。人有經脈。王冰注·經脈者。謂手足三陰三陽之脈。「真誥」卷十二「稽神樞」世遠傳未出。其捨家尋學。事在讖書。

\*人道書「雲笈七籤」卷七「說三元八會六書之法」故云。有天道地道神道人道。此之謂也。

\*恍惚「老子」第二十一章孔德之容。惟道是從。道之為物。惟恍惟惚。惚兮恍兮。其中有象。恍兮惚兮。其中有物。

\*本文「真誥」卷十「協昌期」今又重鈔可修事出此耳。其本文猶在彼卷。「真誥」卷十九「翼真檢」又此六篇中。有朱書細字者。悉隱居所注。以為誌別。其墨書細字。猶是本文。「雲笈七籤」卷六「十二部」唯本文有通相別相以十二部。皆是文字為得理之本。通名為本文。本文猶是經之異名。十二部既通名為經。是通相本文也。

\*書經「無上秘要」卷四十七「齋戒品」誦經必齋。校經必齋。書經必齋。書符必齋。篆籀必齋。「雲笈七籤」卷三十八「太霄琅事十善十惡」奉侍師主。營建靜舍。書經校定。修齋念道。退身讓義。不爭功名。

\*有長「無上秘要」卷五「人品」其結胎受化。有吉有凶。有壽有夭。有短有長。皆稟宿根。結氣不純。

\*治訣